

保健体育科部会

研究主題

豊かなスポーツライフの基礎を固める体育学習 ～評価を生かした支援や指導の工夫～

1 主題について

学習指導要領改訂の趣旨に基づき、3つの視点で研究を進めることとした。

- (1) 幼・小・中・高の連携を通して、系統性を踏まえながら学習内容及び活動内容を明確にすることで、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てることができるであろう。
- (2) 授業の中で「わかる」と「できる」を体得させていくための指導法の工夫・改善に取り組むことで、基礎的・基本的な知識・技能の習得を図ることができるであろう。
- (3) 表現方法や練習・鑑賞・発表・試合などの仕方を考えたり話し合ったりすることで、コミュニケーション能力を培い、論理的な思考力をはぐくむことができるであろう。

以上、上記に示す視点で研究を推進することで、生涯にわたる豊かなスポーツライフの基礎を固める体育学習になるであろうと考え、本テーマを設定した。

2 今年度の取組

月 日	実践内容	月 日	実践内容
4月12日	第1回総合研究会 研究主題の確認	7月12日	第2回総合研究会（下川沿中）
	第2回総合研究会の授業者決定と研究会のもち方について	10月26日	第33回秋田県学校体育研究大会大館大会に全員参加

3 研究内容

(1) 授業研究

- ・期 日 平成24年7月12日（木）
- ・会 場 下川沿中学校
- ・単元名 3年「武道」：柔道
- ・授業者 佐藤 勇一

① 授業者から

- ・今日の授業は4観点の「思考・判断」を見取ることをねらいとして実施した。生徒が思考し判断するためには、基盤となる知識・理解が大切だと改めて実感した。
- ・単元を進めるにあたり、技能の習得には学び直しが必要であり、思った以上に時間を要した。単元計画の時数には余裕をもつ必要性を感じている。
- ・生徒は頑張ってくれた。優しく素直な生徒が多く、直向きに学習へ取り組む。反面、闘争心が薄くなかなか授業に勢いが生まれにくい。
- ・本時は運動量が少なかった。これは、本時で考えた連絡技を次時の学習を通して定着させるという2時間計画に則ったものである。

② 協議

- ・視聴覚機器の活用が効果的だった。自分の動き（技能）を視覚で確認できることのメリットは非常に大きい。「追っかけ再生」機能の付いた機器は各校に1台はあるので、ぜひ活用していきたい。



【固め技ゲームの様子】

- ・生徒の学びを促すためには、学習課題に必然性をもたせる必要がある。やはり前時の学習、特に「まとめ」が大切になってくる。前時のまとめが見える学習シートを工夫していきたい。
- ・生徒の技能向上への意欲を喚起するためには必要感をもたせなければならない。今日の授業では、前時までの真剣な動き（自由練習）の中で、「思うように技がかからない」という状況の中から「連絡技の必要性」が生じる。だから、段階的な指導やルールの工夫などを踏まえ安全面に配慮しながらも、自由練習は欠かせない。
- ・事故防止の観点からいうと、自由練習では、技をかけられたら「潔く投げられる」ことの重要性をしっかりと指導することが大切である。
- ・学習過程で生徒に意図的に思考させる「考える学習」では、実際に動きながら考えさせる方法と座ってじっくりと考えさせる方法がある。指導要領では、体育の学習に「学び方」を身に付けさせることも期待されている。それは、あくまでも「主運動に親しみながら身に付けさせる」ことをねらいとしている。だから、体育では思考を見取る学習においても「動きながら」ということが欠かせないのでないか。



【連絡技を習得し合う学習の様子】

(2) テーマ研究（各校の柔道の実践例や課題を持ち寄り、情報交換を行った。）

(3) 指導助言（高橋 敏治 指導主事）

- ①生徒たちの表情がよく、生徒同士の挨拶や返事、礼儀正しさなどの学習規律の素晴らしさから学級集団としての質の高さがうかがえる。
- ②学習課題を効果的なものにするためには、単元指導計画に基づきながらも、本時と前時、本時と次時のつながりを大切にしてほしい。
- ③今回の授業では単元を通して自由練習を実施していないようだが、柔道の特性に触れさせ生徒の意欲を喚起するためにも、次のことに配慮しながら実施してほしい。
 - ・3年間を見通した指導（技の構造と系統性）
 - ・余裕のある単元指導計画（基礎・基本の定着と確認）
- ④指導要領では「連絡技」とは「相手との攻防に応じて、さらに効率よく相手を投げたり抑えたりする技」と記載されている。
 - ・「さらに効率よく」という視点から、前時までの学習との関連が大切である。
 - ・「攻防に応じて」という視点から、主運動を通した学習が不可欠である。
- ⑤武道は1・2年生が必修である。3年生は球技との選択になるが、学校事情により選択とせずに柔道を実施することもできる。（教員数や施設の条件）

4 成果と課題

(1) 成果

- ・「わかる」と「できる」の橋渡しをするのが思考・判断であり、そのためには、思考のよりどころとなる知識を事前にしっかりと身に付けさせる必要があることを再確認できた。
- ・体育における思考は、「動きながら」「動きを通して」ということを部員で共有できた。
- ・視聴覚機器の活用が「できる」を体得させていくためには効果的だった。

(2) 課題

- ・効果的な教材・教具の開発と、その情報交換の機会が必要である。